

欲不振・嘔気初発。近医で直腸癌・多発肝転移と診断され、1997年12月26日当科紹介。術前精査でH3, N4, T4 (Stage IV) 指摘され切除不能と診断。組織診で低分化型腺癌であり、CDDP+5-FU療法を選択した。1998年1月6日当科入院、1月10日治療開始。1月13日より意識障害、錐体外路徴候を呈し、頭部MRIでは白質全体の高信号域を認めた。経過、画像より5-FUによる白質脳症を疑い、休薬により約2日で症状の改善を得た。

5-FUによる白質脳症の経過、画像上の変化を文献的考察を加え報告する。

27) 内視鏡的切除後、開腹手術を施行した大腸sm癌症例の検討

野本 一博・齋藤 寿一
三浦二三夫・津澤 豊一 (齋藤胃腸病院) 外科
吉田 徹
菊池 直人・横山 喜恵 (同 内科)
工藤 進英 (秋田赤十字病院)
齋藤 清子 (荘内地区健康管理センター)

1990年10月から1997年12月までに内視鏡的に切除された大腸sm癌57例中、追加開腹手術を施行した24例について検討した。Ip型の3例(うち1例は2群のリンパ節転移陽性)、Ips型の1例、Is型の1例にリンパ節転移を認めた。リンパ節転移を認めたIp型は茎が短く太い症例であり、注意が必要と考えられた。ちなみに、同時期の初回よりの大腸sm癌開腹手術例は18例でIIa+IIcの1例にリンパ節転移を認めた。内視鏡治療後、追加手術の適応と判断した場合、リンパ節郭清は2群まで施行することが必要と考えられた。

28) 当院における在宅中心静脈栄養法の検討

川合 千尋 (消化器科・外科) 川合クリニック

現在までに当院では在宅中心静脈栄養 (HPN) を4症例に施行している。短腸症候群が2例、胃全摘後の吸収不良症候群が1例、胃癌再発による経口摂取不能症例が1例である。

【症例1】77歳、男性。残存小腸20cm。91年12月よりHPNを開始。中心静脈カテーテルを挿入後4年5ヶ月で1度交換したのみである。

【症例2】39歳、男性。残存小腸25cm。92年4月よ

りHPNを開始した。2回のカテーテル交換を必要とし、肝機能異常が持続している。

【症例3】69歳、男性。83年1月に胃全摘手術を受け、栄養障害のため入退院を繰り返していた。97年10月よりHPNを開始した。

【症例4】63歳、男性。97年12月に胃癌で胃全摘手術を受け、腹膜再発による経口摂取不能のため98年9月よりHPNを開始した。

以上4症例の経験とその問題点を報告する。

29) 消化器手術後に発生した急性肺梗塞の5例

石山 貴章・三科 武
鈴木 聡・金田 聡
石塚 大・竹石 利之 (鶴岡市立荘内病院) 外科
柳川 直樹

過去5年間に発生した、消化器外科術後の急性肺梗塞症 (PE) 5例を報告する。症例の年齢は69~73歳 (平均65.8歳) で、男女比は2:3。原疾患は悪性腫瘍が3例 (胆嚢癌、結腸癌、胃癌) で、それぞれ拡大胆摘、S状結腸切除、胃全摘を施行し、その他、胆石症に腹腔鏡下胆摘 (吊り上げ法)、原因不明の小腸穿孔に穿孔部閉鎖、ドレナージ術を行った。発症は術後第1~4病日に認められ、全例肺血流シンチで診断し、発症から診断までは2時間~2日間を要した。うち2例にショック症状が認められたが、ヘパリン及びウロキナーゼの保存的治療で、全例を救命し得た。このうち、ステロイド内服例が2例に認められたが、特にステロイドホルモン長期投与例は、PE発症の危険因子の一つとして注目すべきと考える。

30) 鈍的腹部外傷と比較した腹部刺傷15例の検討

高野 征雄・小山 諭
藤田 亘浩・金子 耕司 (秋田赤十字病院) 外科
外山 秀司

腹部外傷の多くは、交通事故などによる鈍的外傷であるが、鋭的外傷も一部見られる。我々は、これまでに鋭的外傷である腹部刺傷15例を経験したので鈍的外傷と比較検討して報告する。＜対象＞1983年から1997年までの15年間に当科で経験した腹部外傷手術例は99例で、鈍的腹部外傷84例、腹部刺傷15例を検討した。＜結果＞鈍的外傷の損傷臓器は、小腸・大腸・腸間膜37、肝臓18、脾臓15、胃・十二指腸6、膵臓5、腎臓4、横隔膜3、その他4例で、脳挫傷、肺挫傷、多発外傷による死因も